4 シンボルに責任を持て

こんにちシンボルに過ぎないものが、明日には、現実をもたらしうるのです。スワスチカ（ハーケンクロイツとも鉤十字とも呼ばれますね）をはじめヘイトの徴に気をつけましょう。視線をそらしてはいけないし、それらに慣れてもいけません。あなた自身でそれらを片づけ、他の者が見習うような手本となってください。

生活するというのは政治的なことなのです。世間があなた方がどう感じているかを気にするからではありません。世間があなた方の振る舞いに反応するからです。私たちの行うちょっとした選択だけでも、将来自由で公正な選挙が行われる可能性に大なり小なり影響する点で、ある種の投票行為にもなるのです。日常における政治では、私たちの使う言葉やジェスチャー、あるいはそれらを使わぬことまでもが、きわめて重要なのです。二〇世紀からのいくつかの極端な（そこまで極端でないものもありますが）例から、どんな風になるのかを私たちは知ることができます。

ヨシフ・スターリン支配下のソ連では、富農（クラーク）はプロパガンダ用ポスターでは「豚」として描かれました――田舎ではあきらかに畜殺を示すいわば「非人間化」の過程です。これは一九三〇年代初めのことであって、ソ連は農村を厳しく管理して急激な工業化のための資本を引き出そうとしていました。他の者よりは土地か家畜を多く持っていた小農が、まず初めに所有物を失う定めでした。豚として描かれた隣人は、彼の土地を盗んでもよい対

象とされたのです。けれど、豚というシンボルを使ったその論理に順った者たちも、次には犠牲者となりました。相対的に貧しい小農を相対的に富裕な小農に敵対させた後、ソ連政府は新しい集団農場のために全員の土地を取り上げたのです。農業集団化が完成すると、ソ連の小農たちに大規模な飢饉がもたらされました。ソヴィエト・ウクライナ、ソヴィエト・カザフスタン、ソヴィエト・ロシアでは、一九三〇年から一九三三年までのあいだに数百万人が、恐ろしい、屈辱的な死を迎えたのです。飢饉の終わるまでには、ソ連の市民たちは、人肉として死体を解体するようになっていました。

ソ連での飢饉が最悪の事態に陥った一九三三年に、ドイツではナチ党が政権の座に就きました。勝利に高揚したナチスは、ユダヤ人商店のボイコットを組織しようと試みました。ボイコットは、初めはそれほどうまくゆきませんでした。けれども、窓や壁にペンキで「ユダヤ人」とか「アーリア人」と印をつけるのは、ドイツ人が家庭生活でお金の出し入れをどうするのかを考える際に、実際に影響を及ぼしたのです。「ユダヤ人」と印をつけられた店には将来はなく、強欲な計画の対象とされました。店の建物に異民族の印がつけられてゆくにつれ、妬みが道義心を歪めてゆきました。もし店を「ユダヤ人」のものとするならば、店に限らずユダヤ人の会社や土地・建物といったものはどうすべきか？　貪欲

さが徐々に膨らんでゆくと、当初は抑えられていたのでしょうが、「ユダヤ人が消えちまえばな」という願いが湧き上がってきました。このようにして、店に「ユダヤ人」と印をつけたドイツ人たちは、ユダヤ人たちがほんとうに消えてゆく過程に参加したのです――その点では、手をこまねいて傍観していたドイツ人たちも同じで実際には参加したのです。印をつけるのを都市の光景として当たり前なものとして受けいれることで、すでにもう、血塗られた未来へと歩み寄っていたのです。

あなた方もいつの日か忠誠のシンボルを示す機会を与えられることでしょう。必ずや、そうしたシンボルが同胞市民を排除するのでなく、同胞市民を包み込むように計らってください。ピンバッジの変遷でさえ無害とはとうてい言えません。一九三三年のナチス・ドイツでは、一党独裁国家が確かな承認を受けるための選挙や国民投票のあいだ、人々は「イエス」というピンバッジを着けていました。一九三八年のオーストリアでは、以前はナチ党員でなかった人々がスワスチカのピンバッジを着け始めました。プライドを表しているように思えるものが、実は排斥をもたらすことにもなるのです。一九三〇年代、四〇年代のヨーロッパでは、いくらかの者たちがスワスチカを着けるのを選択しましたが、そのあとでは別の者たちが、否応なしに黄色い星を着けさせられたのです。

誰ももう革命など信じていなかった共産主義の歴史の終わり頃に、シンボルについての究極的な教訓を見て取ることができます。市民たちが今さら期待も情熱も持たず、願っているのは放っておいて欲しいということだけ――そこまでいっても、公の場で印をつけて回る者たちがいると、まだ暴政を維持できたからです。チェコスロバキアの共産党が一九四六年の選挙で第一党になって政権の座に就き、ついで一九四八年のクーデターで全権を掌握するにいたると、舞い上がったチェコスロバキア市民はたくさんいました。反体制の思想家ヴァーツラフ・ハヴェルが三〇年後の一九七八年にエッセイ「力なき者たちの力」を書いたときに、彼は、ほとんど誰ももうその目標やイデオロギーを信じていなかった抑圧的体制がそれでもなお存続していたことについて説明しています。ハヴェルは、店のウィンドーに「万国の労働者よ、団結せよ！」という掲示を出していた八百屋の譬えを持ち出しました。

その八百屋が実際に「共産党宣言」からのその引用箇所の内容を支持しているわけではないのです。当局との面倒事に巻き込まれずに日常生活を送れるようにウィンドーにその掲示を出しているのです。他の誰もが同じ理屈に従うならば、公的な場は忠誠の印で覆われてしまうし、抵抗など考えられなくなります。ハヴェルは次のように記しています。

我々は八百屋のスローガンのほんとうの意味が、スローガンの文言の示すところと何ら関わりがないことを見てきた。そうであっても、「万国の労働者よ、団結せよ！」という規範はあまりにもなじみ深いものだから、ほんとうの意味はきわめて明瞭であり、おおむね了解されている。その八百屋は体制が耳を傾ける唯一の方法で忠誠心を示したのだ。つまり、定められた儀式を受けいれ、見せかけを現実として受けいれ、ゲームの特定の規則を受けいれてである――かくしてゲームは続けられるし、なによりゲームが存在することが可能になるのだ。

だからとハヴェルは問うたのです。「みんながゲームをやめさえすればどうなるかな？」と。